

「岩村田式」と「佐久系箱清水式」

小山 岳夫

「佐久系箱清水式」土器

近年、私は浅間山麓の裾野である佐久盆地東部から出土する後期弥生土器を「佐久系箱清水式」と仮称している。その特徴は器形は同様でありながら、長野盆地でみられる壺頸部の櫛描T字文・甕口～胴部の櫛描波状文が壺は金属状の篋描矢羽状文・甕は櫛描横羽状文に置き換わっている点にある。これは、佐久盆地東部に限られる異相で、八ヶ岳の裾野に当たる西部は長野盆地と同様相である。

佐久盆地東西の差異は、土器様相にとどまらず竪穴住居の炉にも表れている。東部は固有の「佐久系土器敷き炉」、西部は長野盆地と共通する「普遍系地床炉」である。30年前佐久考古学会刊『赤い土器を追う』でこの違いを指摘、政治性に絡めて解釈したが、石川日出志に戒められた。

「岩村田式」土器

藤森栄一は昭和11年(1936)『考古学』誌上で、長野県の弥生土器を体系化し、最新の時期に「箱清水式」、二番目に『岩村田式』を当てたが、図示されていなかったため、何処の資料を使ったのか定かでなかった。その後、昭和41年(1966)神村透が『日本の考古学Ⅲ』で千曲川流域の後期弥生土器を「箱清水式」に統一したため、以降実態不明のまま「岩村田式」は用いられなくなった。

平成31年(2019)3月、私は長野県立歴史館で昭和初期に神津猛が発掘・収集した資料(以下

『神津猛資料』と呼ぶ)を実見する機会に恵まれ、壺・甕に上記の「佐久系箱清水式」と同様の文様が確認できた(写真)。また、この資料の一部が昭和9年(1934)八幡一郎著の『北佐久郡の考古学的調査』に掲載されていることも確認した。

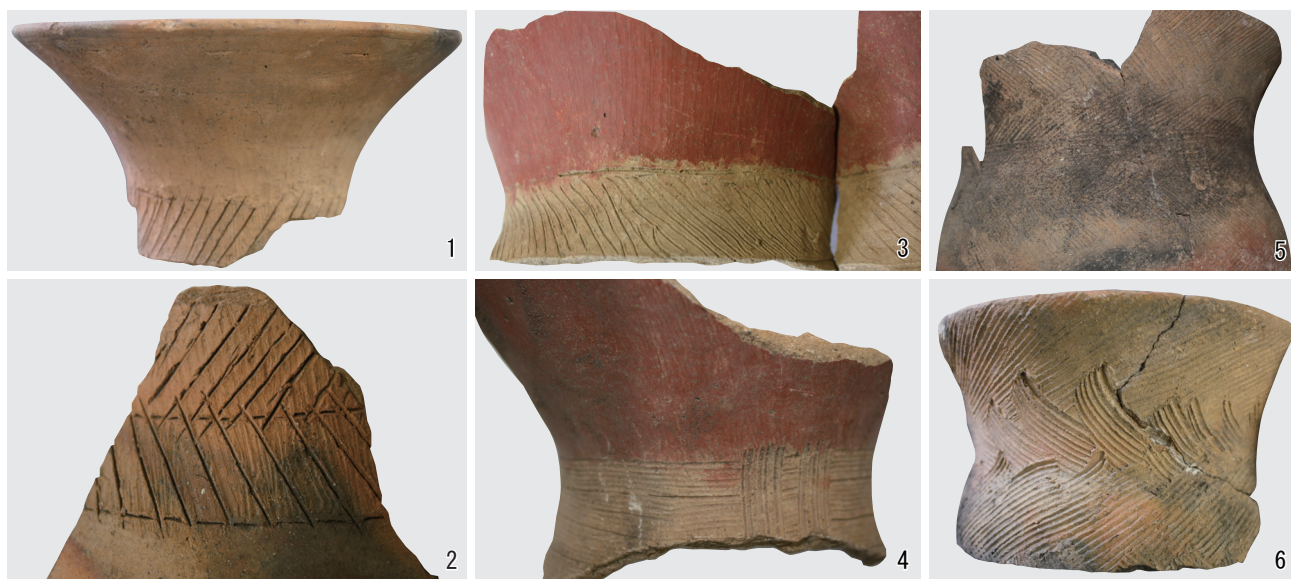
八幡論文は藤森論文を2年先行する同9年刊であり、藤森論文では八幡論文が引用されている。藤森は神津と親交があったという桐原健の証言も勘案すると、藤森は神津猛資料を用いて『岩村田式』を設定した蓋然性が高い。

「岩村田式」再評価

以上、藤森設定の「岩村田式」には小山仮設定の「佐久系箱清水式」と同様に壺の篋描矢羽状文、甕の櫛描横羽状文が含まれていた可能性が高いのである。

「岩村田式」と「佐久系箱清水式」の型式内容がほぼイコールである可能性が高まった今、私は、仮称「佐久系箱清水式」を廃し、佐久盆地東部を象徴するにふさわしい「岩村田式」を83年ぶりに復活させ、小地域型式として再設定しようと考えている。

小地域型式とは細かな地域の土器様相を括る枠組みとして措定するものであり、近刊『専修考古学』16号では中央高地一帯を大枠で括り、大地域型式・中地域型式の設定も想定している。このほか、「岩村田式」の消長、存続時期、基準資料、樽式との関係など詳細も拙稿を参照されたい。



1～3:矢羽状文の壺 4:櫛描T字文の赤色塗彩壺 5・6:櫛描横羽状文の甕 1・2は無彩、3は赤色塗彩 5は八幡論文掲載資料

写真 神津猛資料(長野県立歴史館蔵)